

台北第一師範学校附属小学校の音楽鑑賞教育
— 『標準唱歌学習帖』と『唱歌科教授提要』を通して見る理念と教材—

岡部 芳広*

Music Appreciation Education of Primary School Attached to Taihoku First Normal School

— Philosophy and Teaching Materials through “HYOJUN SHOKA GAKUSHU CHO” and “SHOKA-KA KYOJU TEIYO” —

Yoshihiro OKABE

【要旨】

台北第一師範学校附属小学校の研究団体である正榕会は、昭和2（1927）年に『標準唱歌学習帖』を、また翌昭和3（1928）年には『唱歌科教授提要』を発行している。これらの中にはそれぞれ音楽観賞用の教材が示され、レコード番号も付されている。これは、大正自由教育の潮流の中、歌を歌うこと一辺倒であった明治期以来の唱歌教育から、学習領域の拡大がみられた一例で、植民地台湾における「唱歌科から音楽科へ」の動きへのひとつの提案であったといえる。その鑑賞教材を分析することにより、『標準唱歌学習帖』のものは、山本壽の『音楽の鑑賞教育』に依拠し、間接的にアメリカの音楽鑑賞教育書である《Music Appreciation for Little Children》の影響を受けていることが明らかとなった。また、『唱歌科教授提要』の鑑賞教材では、その影響は大きく減退するが、鑑賞教材の提案はより豊かなものとなった。また『唱歌科教授提要』執筆者の木戸春市が音楽鑑賞教育の目的を「音楽的美的直観」に導くものとするなど、北村久雄の影響を受けている可能性を指摘した。

キーワード：植民地台湾，唱歌教育，音楽鑑賞教育，木戸春市，北村久雄

1. はじめに

台湾は日清戦争の戦後処理として下関条約によって清より割譲を受け、明治28（1895）¹年より日本の版図となった。現地人に対する学校教育は領有直後には着手され、それは奇しくも日本の近代音楽教育の始祖とも言える伊沢修二によって始められた。伊沢は台湾領有とほぼ同時に学務部心得として渡台し、近代教育制度の整備に着手した。まず「芝山巖学堂」を開き、数人の台湾人生徒を相手に教授を開始したが、明確に近代的な「学校」として整備されたのは明治29（1896）年創立の「国語学校」であ

ると言える。国語学校は師範部と語学部を持ち、その後実業部を開設し、日本人と台湾人を共に対象とした近代学校であった。大正8（1919）年の第二次台湾教育令により「台北師範学校」に改組され、台湾の師範教育を担う中心的学校として明確に位置づけられた。その後昭和2（1927）年に台北師範学校は「台北第一師範学校」と「台北第二師範学校」に分かれることとなり、もともと台北師範学校が併せ持っていた小学校教員の養成機能（小学師範部）と公学校²教員の養成機能（公学師範部）を、第一師範が小学校教員養成に、第二師範が公学校教員養成

* おかべ よしひろ 相模女子大学学芸学部子ども教育学科

にと、その機能を分離・特化することとなった³。昭和18（1943）年に両校は再び統合され、「台北師範学校」として再出発するが、その2年後には敗戦により、日本の統治は終了する。

本稿は、昭和2（1927）年に発行された『標準唱歌学習帖』と、翌昭和3（1928）年に発行された『唱歌科教授提要』を対象として、その音楽鑑賞教育に焦点を当て、その時期の台北第一師範学校附属小学校（以下、第一師範附小）における音楽鑑賞教育の様相の一断面を明らかにすることを目的とする。

植民地台湾の教育史研究については、平成12（2000）年民進党への政権交代により進められた民主化以降、盛んに行われるようになったが、初等教育の教科教育についての研究は、公学校教育を取り扱ったものが大半である。小学校唱歌教育の分野では、本稿と同じく第一師範附小の『標準唱歌学習帖』と『唱歌科教授提要』を取扱い、その唱歌教育（唱歌指導）の教材観と指導法について論じた拙著⁴があるが、管見の限りその他は見当たらない。本稿において、植民地台湾の小学校における音楽鑑賞教育の様相の一端を明らかにし、植民地での教育について考える一つの契機としたい。

2. 当時の内地（日本）の音楽鑑賞教育

植民地台湾の状況に言及する前に、当時（大正期から昭和初期にかけて）の内地（日本）の音楽鑑賞教育についての動向を、主に寺田貴雄と三村真弓の研究成果に依拠して概観しておきたい。寺田は、日本の音楽鑑賞に対する意識は明治期中期にその萌芽が見られるとしているが⁶、明治の末期頃から、その関心は次第に高まり⁷、大正期に入ると、学校唱歌教育における鑑賞教育の重要性が語られるようになった。大正4（1915）年に、歌唱一辺倒であった明治以来の唱歌教育を批判し、芸術教育においては「受容」（鑑賞）と「発表」（唱謡）が補完的に必須であると主張したのは、青柳善吾⁸であった。青柳は「小川友吉」の筆名で、東京音楽学校校友会誌『音楽』に「鑑賞的教授に就て」⁹という文章を寄せ、唱謡と鑑賞の関係について次のように述べている。

（前略）芸術的教科の取扱ひに感覺的の方面と運動的の方面との二方面を考察せねばならぬと思ふ。換言すれば直観を主とするもの表示を主とするものの両面にして方法の上から言へば受容と発表とは必ず両立して離るることの能きぬ

関係のものである。つまり受容は発表の前提にして、発表は受容の完結であるとも言ひ得る。

（中略）然らば芸術的教科即ち唱歌科に於て受容と発表との二方面を何んと称するか、吾人は之に名づくるに前者を鑑賞後者を唱謡と呼ぶのである。此両者は音楽教育上忘るる可らざる二大方面にして、完全なる唱謡と同時に完全なる鑑賞をも為さざる可らざるは前述の如くで、其何れも等閑に附す事は能きない。¹⁰

このように青柳は、鑑賞と唱謡の両者は不可分であることを強調しており、両方両立してこそその音楽教育であると主張した。そしてさらに、

（前略）従来の唱歌教授は重に発表即ち唱謡の方面を主要なる事と誤解し、徹頭徹尾唱はしむる事のみを以て唱歌科の能事終れりとなし、而して受容即ち鑑賞的の方面を閑却して毫も顧みざりし謬見の甚しきものであつて、僅に唱歌教授の半面のみを完了したる不具な芸術教育と言はねばならぬ。¹¹

と、明治以降行われてきた歌うことを中心とした唱歌教育のありかたを「謬見の甚しきもの」とし、これまでの唱歌教育を不完全なものとして批判した。

青柳のこういった音楽鑑賞教育の理念は、ドイツの教育学者W・ラインやE・リンデの説に依拠しており¹²、ドイツの音楽教育思想の影響を受けたものといえることができる。ドイツの音楽教育思想の重要な特徴として挙げられるのは「教師の人格を通じた音楽的陶冶」であるが、青柳は蓄音機の普及後も、教師の範唱・範奏による音楽鑑賞にこだわった。三村は「青柳はドイツの音楽鑑賞教育論の特徴である、教師の人格を通じた音楽的陶冶という考え方を始終貫き、レコード鑑賞の有用性を認めながらも、教師自身の演奏による鑑賞教育を主張し続けた。」¹³と青柳の音楽鑑賞教育に対する立場を総括し、「唱謡を芸術的に深めるための鑑賞という考え方は始終根柢にあり」¹⁴と、青柳の音楽鑑賞教育は「唱謡のためのもの」であったという評価をしている¹⁵。

そしてその後、飛躍的に音楽鑑賞が注目されるようになったのは、大正13（1924）年に山本壽が『音楽の鑑賞教育』¹⁶を、同年に津田昌業が『音楽鑑賞教育』¹⁷を出版してからである。広島高等師範学校附属小学校訓導であった山本、同高等師範学校専攻

科に在籍していた津田は、共に当時アメリカの代表的な音楽鑑賞教育の指南書であった《Music Appreciation for Little Children》(以下、MALC)と《Listening Lessons in Music》(以下、LLM)に影響を受け、これらに大きく依拠するかたちで、前掲書を著した。MALC(1920)はアメリカの大手レコード会社であるVictor Talking Machine社(以下、ビクター)の教育部が出版した音楽鑑賞教育書で、当時のアメリカの進歩主義的教育の影響を色濃く受けており、発達心理学における感覚器、連想期、青年期の三つの発達段階の理論を踏まえて書かれている¹⁸。LLM(1916)はA・M・フライバーガーの著作で、シルバー・バーデッド社から出版された。寺田によると、「MALCと同様に子どもの発達段階を基礎とした実践的な内容をもっており、当時のアメリカの音楽鑑賞教育書の一般的特徴を有していた¹⁹」という位置付けの書物である。

山本と津田の著書では、「国民に善良な音楽を提供し、音楽を愛好させること、知的に享楽させることが鑑賞教育の目的²⁰とされており、「これは、まったくアメリカの音楽鑑賞教育の考え方である。²¹」と三村は述べている。「問答法によって、曲の情景、曲の種類、主題の反復、楽器の種類・音色を認識させる²²」という指導法で、「1枚のレコードを、学年ごとに様々な教育内容の学習に合わせて何度も使用²³」することもしばしばあるなど、MALCとLLMをほぼ訳出するかたちとなっている²⁴。

この山本と津田の2冊の教育書は当時の音楽教育界に大きな反響を呼んだようで、青柳は『本邦音楽教育史』の中で、

(前略)両書共に鑑賞教育の理論の基礎づけに幾分手を省いて居る処があり、ヴィクターのレコード名を陳列するに急であるかに見える。斯うした難点はあるが、鑑賞教育を知らなかつた当時の人々を啓発した両書の寄与は蓋し莫大であつた。²⁵

と、若干の保留はしつつも、その功績を評価した。

このように、ドイツの音楽教育思想の影響を色濃く受けた青柳が音楽鑑賞教育の重要性を広く唱え、その後にアメリカの音楽鑑賞教育の理念や方法が、山本と津田によってもたらされたというのが、大正期から昭和初期にかけての内地(日本)の音楽鑑賞教育の状況であった。

3. 『標準唱歌学習帖』の鑑賞教材

『標準唱歌学習帖』(以下、『学習帖』)は、第一師範附小の研究団体である正榕会²⁶が発行したものである。その全体的な詳細については、前述の拙著「昭和初期における台北第一師範学校附属小学校の唱歌教育—『標準唱歌学習帖』と『唱歌科教授提要』に見る教材観と指導法—」に譲るとして、ここでは、『学習帖』の鑑賞教材について検討する。

『学習帖』は、緒言・凡例・各学年教材配当表・楽典指導事項一覧表・目次・当該学年の楽曲・祝祭日唱歌・鑑賞教材・学習の仕方(第3学年用から)、という構成になっており、その分量は、第1学年用で38ページ、第6学年用で55ページである。その多くは歌唱教材に裂かれ、その後のページに「蓄音機による鑑賞教材」と題されて、鑑賞教材が列挙されている。【図1】は、第4学年用のものである。

題 目	發 行 所	レコード番号
春の歌	Victor	18648
白鳥	同上	45008
かなりや	日蓄	3978
かなや	Victor	17937-A
軍艦マーチ	日蓄	2040
ショパンの一分間ワルツ	Victor	64076
ワルツする人形	同上	64734

【図1】

見てわかるように、曲目だけでなく、レコード番号が付してある。これは教師の便宜に供するものと考えられる。『学習帖』は児童に持たせるためのものであるが、巻頭の「緒言」「凡例」に続いて「各学年教材配当表」と、「楽典指導事項一覧表」が載せられており、これは教師の指導の助けとするものである。『唱歌科教授提要』第八章は「標準唱歌学習帳」というタイトル^(ママ)の章で、『学習帖』についての解説や歌唱教材の指導の要点などが記された章となっている。ここに「教材配当表と、楽典指導事項一覧表と、学習の仕方²⁷をみると、教授者は指導案がなくとも直ちに教授が出来ること。」²⁸を、この『学習帖』の「長所」として挙げている。「各学年教材配当表」は、第1学年から6学年までの全ての歌唱教材について、指導すべき学期の配当と、「拍子」、

「調子」, 「音程」, 「音域」を一覧表にしたもので、また「楽典指導事項一覧表」は、第3学年²⁹から6学年までの楽典指導事項を、各学期ごとに、「拍子」, 「調子」, 「曲体」, 「音符」, 「休止符」, 「読譜写譜」, 「其他」に分けて示したものである。すなわち、『学習帖』の中には、教師用の情報も入れ込まれていることがわかる。こういった状況から、「蓄音機による鑑賞教材」に付されたレコード番号は、教師の便宜に供するものと考えられる。

これらの鑑賞教材を学年別に並べ、レコード番号を記し、そのレコードが前述の山本壽『音楽の鑑賞

教育』と津田昌業『音楽鑑賞教育』のどのページに出ているかを一覧にしたものが【表1】である。

使われているレコードは、国内レーベルは、日蓄（日本蓄音機商会。現在の日本コロムビア）、東蓄（東京蓄音機株式会社）、オリエント（東洋蓄音機）の3レーベルであり、それらを合計すると延べ16曲である。そのほとんどが日蓄で、東蓄は第5・6学年用で1曲ずつ、オリエントは第2学年用で2曲、計4曲のみである。残りの35曲はすべて海外レーベルで、それはビクターのみである。低学年では日本の楽曲が多く、従って国内レーベルのほうが多い

【表1】『標準唱歌学習帖』鑑賞教材と、『音楽の鑑賞教育』・『音楽鑑賞教育』との対応一覧

	曲目*	レーベル	レコード番号	重複	山本**	津田***	備考
第1学年	1 高い歩調の馬のテーマ	ビクター	18253		316		
	2 時計店	ビクター	35324-A		316	129	津田では35324
	3 旋風	ビクター	18684		317	158	
	4 鶯の鳴き声	ビクター	45057・45058		318	220	
	5 さくらさくら	日蓄	518		316	114	津田では5186
	6 うま	日蓄	4833		316	113	
	7 四丁目の犬	日蓄	2735		316	115	津田では2734
	8 蝸牛	日蓄	2626		317	291	
	9 ツキトガン	日蓄	48684		317	263	山本・津田では番号違い4831
第2学年	10 時計店	ビクター	35324-A	1年	—	—	
	11 旋風	ビクター	18684	1年	—	—	
	12 鶯の鳴き声	ビクター	45057・45058	1年	—	—	
	13 浦島太郎	日蓄	1525		319	115	津田では1203
	14 十五夜お月さん	日蓄	2734		319		
	15 富士山	オリエント	1952-B		319	115	津田では三光堂5477
	16 案山子	オリエント	1952-B		320	115	津田では1413
17 春が来た (ヴァリエーション)	日蓄	4735		321	292	津田では帝蓄 (番号は同じ)	
第3学年	18 森の鳥	ビクター	16835-A		321	129	津田では16835
	19 春の声	ビクター	16835-B		321	269	津田では16835
	20 ユウモレスク (鳥の声入り)	ビクター	45061-A.B		321		
	21 洋服屋と熊	ビクター	18598-A		323	253	津田では18598
	22 黒森の狩	ビクター	35324-B		323	247	津田では35324
	23 君が代マーチ	日蓄	1234		323		
	24 呼子鳥	日蓄	4838		325		山本では4年
第4学年	25 春の歌	ビクター	18648		324	141	
	26 白鳥	ビクター	45098		324	130	津田では45096
	27 かぢや	ビクター	17937-A		325		
	28 ショパンの一分間ワルツ	ビクター	64076		326	130	津田では810
	29 ワルツする人形	ビクター	64734		326		
	30 かなりや	日蓄	3978		325	116	
	31 軍艦マーチ	日蓄	2049		325		

	曲目	レーベル	レコード番号	重複	山本	津田	備考	
第5学年	32	ユウモレスク	ビクター	74163		327	139	津田では 17454
	33	各国の子守うた	ビクター	18440		328		
	34	同上	ビクター	17454		328	138	
	35	同上	ビクター	18664		328	142	
	36	同上	ビクター	46102		328		
	37	見よ勝利の勇士来る	ビクター	18655-A		329	135	津田では 18655
	38	陸軍マーチ	ビクター	35493		329	134	
	39	凱旋マーチ	ビクター	50210-A		329		
	40	ミニユエット	ビクター	16474		203	185	山本では 4年
	41	ガボット	ビクター	45116		203	96	山本では 4年
42	庭の千草	東蓄	2523		326		山本では 4年, 津田ではビクター50220	
第6学年	43	春の曲	ビクター	66075		330		
	44	ゴンドラ	ビクター	64530		330		
	45	朝 (グリーク)	ビクター	35470-A		330	132	津田では 35470
	46	月夜 (シューマン)	ビクター	64554		336	385	山本では高等1・2年女子, 津田では 996
	47	ラスト・ローズ・オブ・サマー	ビクター	64958		337		
	48	見よ勝利の勇士来る	ビクター	18655-A	5年	—	—	
	49	陸軍マーチ	ビクター	35493	5年	—	—	
	50	凱旋マーチ	ビクター	50210-A	5年	—	—	
	51	故郷の廃家	東蓄	2512		336		

* 曲目の表記は原文ママ。

**「山本」とは『音楽鑑賞の教育』のこと。その曲の掲載ページを記した。

***「津田」とは『音楽鑑賞教育』のこと。その曲の掲載ページを記した。

が、学年が上がるに従って、西洋の楽曲が多く取り上げられるようになり、ビクターレーベルのものが多くなっている。日本の楽曲は童謡が多く、《軍艦マーチ》や《君が代マーチ》といった器楽曲は一部分である。一方西洋の楽曲は、《庭の千草》や《故郷の廃家》といった、日本語の歌詞が付けられて「唱歌」として歌われていたもの³⁰以外はすべて器楽曲で、そのほとんどが「描写音楽」や「標題音楽」である。

『音楽の鑑賞教育』のp.316からp.338まで「唱歌教授に関連せる音楽の鑑賞教授要目」と題して、尋常小学校第1学年から高等小学校1・2年まで、月別に唱歌教材と鑑賞教材が列挙されているが、それにはレコード番号も付いている。『学習帖』の延べ51曲のレコードをこの「教授要目」と照合したところ、国内のレーベル、外国のレーベル(ビクター)にかかわらず、すべてこの「教授要目」に挙げられている楽曲で、レコード番号も1曲を除き全て一致している³¹。津田の『音楽鑑賞教育』に収められているレコードの曲名と番号とも照合したが、15曲が見当たらず、また番号が違うものがいくつかあっ

た。この結果から、『学習帖』の鑑賞教材は、すべて山本の『音楽の鑑賞教育』の中の「唱歌教授に関連せる音楽の鑑賞教授要目」から引いてきたことがわかる。

4. 『唱歌科教授提要』の鑑賞教材

『唱歌科教授提要』(以下、『教授提要』)には、「鑑賞用レコード学年配当表」が掲載されており、それぞれの学年の各学期に、どのような楽曲を聴かせるのか、レコード番号と共に一覧になっている。それをまとめたものが【表2】で、楽曲名に網掛けをしたのが海外レーベルのレコードで、網掛けをしていないのが国内レーベルのものである。

見てわかるように、第1学年ではすべてが国内レーベルで、第6学年ではすべてが海外レーベルである³²。その割合の推移を一覧にしたものが【表3】である。

学年が進行するにつれて国内レーベルが少なくなっていき、海外レーベルは逆である。第6学年は曲数自体が少なくなっているが、これは、交響曲やピアノソナタなど多楽章形式の楽曲が多く置かれて

【表2】『唱歌科教授提要』所収の鑑賞教材一覧

（網掛けは海外レーベル）

第1学年

曲目*	レコード番号
兔と亀	日蓄 1599
雀の学校	日蓄 15504
靴が鳴る	日蓄 15504
ないしょばなし	日蓄 15706
四角のうた	日蓄 15706
姥捨山	日蓄 15706
日ぐれ	日蓄 15706
ポチとタマ	日蓄 1207
楽隊遊び	日蓄 1207
雨	日蓄 3979
りすりす小りす	日蓄 3979
春の草	日蓄 16032
秋の草	日蓄 16032
木の葉	日蓄 16032
かなりや	日蓄 3979
海雀	日蓄 16032
森の鍛冶屋	日蓄 16161

第2学年

曲目	レコード番号
四丁目の犬	日蓄 2735
人買船	日蓄 2735
十五夜お月さん	日蓄 2735
鶏さん	日蓄 2735
お山の鳥	日蓄 2979
九官鳥	日蓄 2979
ダリヤ	日蓄 2979
帰雁	日蓄 2979
君が代行進曲	日蓄 1234
小鳥屋の店	P 10068
森の鍛冶屋	O 2671
黒森の水車	O 2671
軍艦マーチ	日蓄 2049
黒森の狩	V 35324
時計屋の店	V 35324

第3学年

曲目	レコード番号
ウィリアムテル	オリエント 3102
お玉じゃくし	日蓄 16380
叱られて	日蓄 16380
フーゲ	V 30008
ダンス	V 30008
演習	日蓄 15398
世の態	日蓄 15398
金剛石	日蓄 15398
花すみれ	日蓄 15398
鐘の歌	日蓄 15863
美しいダニユーブ	日蓄 16030
タランテラ	P 10011
舟歌	P 10011
かやの木	日蓄 16315
かへろかへろ	日蓄 16315

第4学年

曲目	レコード番号
スーベニール	C 1410
ミニユエット	C 1410
旅愁	日蓄 15939
夕べの鐘	日蓄 15939
トロバトーレ	P 20023
春の歌	C 3605
ハンガリアンダンス	C 3605
ホ長調第一楽章	V 6462
ザ・ラスト・オブ・サンマー	C 7337
春のささやき	C 7337
ローザムンデ（舞曲）	P 30006
モーメント・ミュージカル	P 30006
一八一五年大序曲	V 35729
風	日蓄 15518
四つ葉のクロバ	日蓄 15518
からたちの花	日蓄 15939
ロングロンガアゴー	日蓄 15650
ハンガリアン狂詩曲	C 7007
ホ長調前奏曲	P 40037
ガボット	P 40037
ニーナの死	V 519
サンマー・ムーン	V 519

第5学年

曲目	レコード番号
フラスクータのセレナーデ	V 1158
クライスラーのセレナーデ	V 1158
シンプルアベ	C 3830
白鳥	C 3830
ソナチネ作品 55 - 2	P 20050
ソナチネ作品 55 - 3	P 20050
ブラームスの子守歌	日蓄 16034
つむぎうた	日蓄 16034
故郷の廃家	日蓄 15395
浜千鳥	日蓄 15395
ソナチネ作品 22 - 1	P 20020
ソナチネ作品 55 - 1	P 20020
ローエングリン序曲	P 40160
シューベルトの子守歌	日蓄 5154
菩提樹の歌	P 40007
流浪者の歌	P 40007
インデヤンラメント	P 40012
キャプリス・ヴィエンノア	P 40012
エグモンド序曲	P 40156
ソナタ・ワルドシュタイン	P 40183
チゴイネルワイゼン	O 16210
魔王	P 60016
漁師の子	P 60016
タンホイゼル大行進の合唱	P 40105
タンホイゼル巡礼の合唱	P 40105
ヘ長調弦楽四重奏	P 40092・40093
ソナタ作品 12 番	P 40094
ロ短調交響曲	V 6461

第6学年

曲目	レコード番号
羅馬の謝肉祭	P 60036
ローエングリン告別の歌	P 60044
ローエングリンの物語	P 60044
ソナタ・パシイテイツク	P 40176・40177
第八交響曲	P 40062・40064
魔笛	P 60036
セレナーデ	P 40004・40005
ソナタ告別	P 40189・40190
ソナタ月光の曲	C 9094・9095
交響楽詩	P 60005・60009
英雄の生涯	記入なし
第九交響曲	記入なし

* 曲目の表記は原文ママ

【表3】『教授提要』鑑賞教材の国内外レーベルの曲数

（単位：曲）

	第1学年	第2学年	第3学年	第4学年	第5学年	第6学年
国内レーベル	17	10	11	6	5	0
海外レーベル	0	5	4	16	23	10*

* レコード番号が落ちているものが2曲ある

おり、1曲の演奏時間が長い曲が増えたからであろう。

また、国内レーベルの楽曲には、《ブラームスの子守歌》など海外の楽曲も数曲見られるが、多くは日本の唱歌や童謡であることから、低学年では日本の唱歌や童謡、つまり声楽曲を主体に、学年が上がるにつれて、海外の楽曲、多くは器楽曲を主体に、という構成になっていることがわかる。

また、『学習帖』では国内レーベルはほとんどが日蓄、海外レーベルはすべてがビクターであったが、『教授提要』ではその傾向に変化が見られる。国内レーベルは日蓄以外はオリエントの1曲と、変わらず日蓄がほとんどであるが、海外レーベルは、以下のようになっている【表4】。

『学習帖』では海外レーベルはビクターのみだったが、『教授提要』でビクターの他に、ポリドール、オデオン、コロムビアが使われており、ビクターは2割にも満たず、代わりにポリドールは6割弱を占める。LLMでは、ビクターとコロムビアは扱っているが、ポリドールやオデオンは扱っておらず、LLMに依拠したということでもなさそうである。この現象の背景は今のところ不明であるが、いずれにしても、『学習帖』では明らかに、山本の『音楽の鑑賞教育』に依拠して鑑賞教材が選定されていたが、『教授提要』ではその依拠の度合いが格段に下がっており、ビクターの楽曲であっても、『学習帖』と『教授提要』で共通のものは、《黒森の狩》と《時計やの店》の2曲のみである。また、『教授提要』ではリストアップされた曲数も多く、また交響曲やピアノソナタ、オペラの合唱曲、弦楽四重奏曲など、演奏時間が長く、規模の大きい楽曲が多く採り入れられており、格段の違いが見て取れる。昭和2(1927)年に出された『学習帖』は台北第一師範学校音楽科教諭であった一條愼三郎³³が編集の中心人物であった³⁴。一方、『教授提要』は『学習帖』の翌年である昭和3(1928)年に出され、第一師範附小訓導であった木戸春市が編集の中心人物である³⁵。次章で述べるが、木戸は大正自由教育の影響を強く受けて

おり、教育観・教育方法ともに、それまでのものとは一線を画した人物である。『学習帖』に鑑賞教材を入れ込んだということから、一條が音楽鑑賞を重視したことは見て取れるが、それは山本の『音楽の鑑賞教育』に提示された楽曲から抜粋して掲載したものに過ぎなかった。しかし、『教授提要』では『音楽の鑑賞教育』を越えた視点で鑑賞教材が選定されており、量的にも質的にもその差は明らかで、非常に豊かなものとなっている。これは一條と木戸の音楽鑑賞教育に対する見識の差と見てよからう。

5. 木戸春市の音楽鑑賞教育観

前述したとおり、『教授提要』は木戸春市³⁶が執筆したことから、本稿では、『唱歌科教授提要』の記述は木戸の考えであるという前提で取り扱う。

昭和初期の当時、内地においても蓄音機は高級品であったが、『教授提要』には「蓄音機やレコードを有する家庭や学校が非常に殖えて来たことはよろこばしいことである。」³⁷とあり、この記述を額面通りに受け取ることは慎重になるとしても、当時の植民地台湾で蓄音機やレコードが普及しつつあったことは汲み取れる。「鑑賞教授の必要が唱へられ、読方でも図画でも、現今では真剣な研究がつまれてゐる。又音楽の鑑賞教授も近来盛んに唱へられるやうにな」³⁸たとあるように、昭和に入ると『台湾教育』や『第一教育』といった教育雑誌に音楽鑑賞についての記事が見られるようになり³⁹、また、唱歌の授業で鑑賞を取り扱った研究授業が行われるなど、「唱歌教育は歌を歌うこと」という明治以来の図式が転換しつつあるのがわかる。木戸は、「音楽を鑑賞することは吾々のあらゆる音楽性発動の原動力となるものである。随つて音楽性の開発指導は鑑賞を本体としなければならぬ。」⁴⁰と、唱歌教育における音楽鑑賞指導を重視していることがわかるが、その意味を以下のように述べている。

音楽鑑賞とは、その作品の精霊と我が生命と

【表4】『教授提要』鑑賞教材の海外レーベルの内訳

(単位：曲)

	第1学年	第2学年	第3学年	第4学年	第5学年	第6学年	合計
ポリドール		1	2	5	17	9	34
オデオン		2			1		3
コロムビア				7	2	1	10
ビクター		2	2	4	3		11

が全く融け合って、我とも彼とも判断することの出来ない心の充実相である。つまり全身活動を作品そのものの中に融けこまして、全く同一の流れとなつて無我の状態となることである。

この瞬間こそは、現実的な営利、邪念等の我欲を一切忘れて、吾が魂は全く自由な理想境にさまよふものである。⁴¹

これは、大正期から戦中期にかけて、長野市や神戸市で唱歌・音楽専科訓導であった北村久雄⁴²の音楽鑑賞教育観に通じるものがある。北村はその主著である『音楽教育の新研究』⁴³で、以下のように述べている。

さて音楽の独自性とは一体何であるか。それは私達をして、音楽それ自身の状態にまで誘導するところの作用である。然らば私達の意識を音楽の状態に置くと云ふその音楽の状態とは如何なるものであるか。それは私達の心が、最も自由なそして最も純粋な音楽の世界にまで引き揚げられた精神状態意識状態である。⁴⁴

つまり、私たちの精神状態が音楽の世界と合一されている状態を、北村は「音楽それ自身の状態にまで誘導」された状態といい、木戸は「その作品の精霊と我が生命とが全く融け合」うという表現で表しているといえる。また、北村はその瞬間を、「私達の心が、最も自由なそして最も純粋な音楽の世界にまで引き揚げられた精神状態」であるといい、木戸は、「現実的な営利、邪念等の我欲を一切忘れて、吾が魂は全く自由な理想境にさまよふものである。」とした。これらは、表現こそ違うが、非常に類似した概念である。

これは、とりもなおさず、北村が音楽教育の上で最も重視した「音楽的美的直観」であり、従来の徳育や国語教育に従属した音楽教育とは一線を画するものであった。植民地台湾の音楽教育において「音楽的美的直観」をその教育の要義とした例は管見の限り木戸以外おらず、これは特筆に値する。

また、木戸が明治期以来唱歌教育に課せられてきた「徳性ノ涵養」について否定的な点も、北村との類似点として挙げることができよう。北村はこの点について、『兼ねて美感を養ひ徳性の涵養に資する』と言ふ如な教授要旨にほだされて、人間の内部に在る、音楽的な本性に目覚めない、所謂徳育的教授は、

此の見地から見ると、はるかに低級なものであらうと思ふ。」⁴⁶とかなり手厳しく批判している。

木戸は『教授提要』の第二章「我が校唱歌教授の目的」において、教則（台湾公立小学校規則）第二五条の「徳性ノ涵養ニ資スル」は、「適当な音楽生活を営むことによつて、児童の人格が向上発展せらるるのである」といふ意味に解釈したい」と、抑制的な態度を見せている。さらに木戸は、

再び言ふ。「平易ナル歌曲ヲ唱フコトヲ得シメ」とか「徳性ノ涵養ニ資スル」といふ表面の字句の解釈のみにとらはれてはいけない。あくまで唱歌を所謂技能科から救ひ出し、而して鋭敏なる感受性を叫び醒し、善い作品を歌はせ、きかせ、豊富な経験によつて音楽鑑賞の能力を養ふことを忘れてはならぬ。⁴⁷

と言葉を重ね、従来の唱歌教育のあり方を退け、それからの脱却を志向している。植民地の師範学校附属学校教員としての立場もあってか、北村のように正面から直裁に否定する表現は用いていないが、内容的には十分否定的である。

また、「唱歌教授の目的」において、その最後を「鑑賞の能力の育成の重要性」で結んでいる点も興味深い。これも唱歌教育を、「唱歌教授」と「音楽鑑賞教育」の二本柱で捉えている北村と通じるところがあり、興味深い。

以上、木戸の音楽鑑賞教育観が、「音楽的美的直観」に導く教育であることなど、北村の主張との類似点について述べてきた。青柳が「刊行数年ならずして数千部を重刷された」と云ふことは希有のことであり、如何に広く読まれたかが窺はれる。⁴⁸と賛辞を送るほど『新研究』が当時の日本の唱歌教育界に広く受けいられていたという背景もあり、木戸の音楽鑑賞教育観は北村の影響を受けている可能性が濃厚であると指摘したい。今後この点については、幅広いアプローチでさらに検討が必要であろう。

6. 結びにかえて

本稿は、『標準唱歌学習帖』と『唱歌科教授提要』の鑑賞教材や内容を分析することにより、台北第一師範学校附属小学校での音楽鑑賞教育の一端を明らかにすることを試みた。その結果、『学習帖』が、山本の『音楽の鑑賞教育』から鑑賞教材を引いてきており、MALCの影響を間接的に受けているとい

うこと、また『教授提要』の鑑賞教材ではMALCへの依拠の度合いが下がり、ビクター以外の海外レーベルも採り入れられるようになったことが明らかとなった。また、木戸春市の「音楽的美的直観」をその中心に据えた音楽鑑賞教育観が、北村久雄の影響を受けている可能性を指摘した。こういった木戸らの試みは、当時の大正自由教育の潮流の中、明治期以来の歌を歌うこと一辺倒の唱歌教育から指導領域の拡大を試みたもので、師範学校の附属小学校という、台湾での初等教育のセンター的役割を担う立場にあったことを勘案すれば、これは台湾全島の小学校に対するひとつの提案であったと位置づけられる。

今後は、『教授提要』の鑑賞教材がどのような経緯や理念で選定されたのか、また木戸の音楽教育観と内地の音楽教育論とがどのような関係にあるのか、そしてそれらが植民地における教育史の文脈でどのような史的意義を持つのか、広い視点で検討を進めていきたい。

〔付記〕本稿は、「第9回相模女子大学子ども教育学会研究会」（2016年9月3日）における口頭発表をもとに、加筆・修正したものである。

注

- 1 本稿においては、研究対象となる歴史的事項を扱うときはこのように和暦と西暦を併記する。それは、歴史的事項を考察するときに、「明治期」、「大正期」、「昭和期」といった時代区分が、意味を持っていると判断するからである。
- 2 台湾人児童を収容する初等教育機関。
- 3 吉野秀公『台湾教育史』、昭和2（1927）年、台湾日日新報社、pp. 536-537
- 4 『標準唱歌学習帖』は昭和2（1927）年に発行されており、奥付の「著者」を見ると「台北師範学校附属小学校内正榕会」（「正榕会」については、後述注5を参照のこと）となっているが、これには注意が必要である。巻頭の「緒言」の日付は「昭和二年一月」であるが、奥付にある発行年月日は「昭和二年五月一七日」となっている。台北師範学校が第一師範と第二師範に分離したのは、吉野秀公の『台湾教育史』（前掲注3）によると昭和2年5月12日であるから、この『学習帖』は台北師範学校が分離する前に編集作業が行われ、分離した直後に発行されたということがわかる。とな

ると、厳密には奥付の「著者」は「台北師範学校附属……」ではなく、「台北第一師範学校附属……」となるべきである。

- 5 「昭和初期における台北第一師範学校附属小学校の唱歌教育—『標準唱歌学習帖』と『唱歌科教授提要』に見る教材観と指導法—」、『お茶の水音楽論集』第18号、2016年、pp. 10-22
- 6 寺田貴雄「日本における音楽鑑賞教育の軌跡一、明治二〇年代の演奏会と人々の意識」『おんかん 音楽鑑賞教育』No. 389、音楽鑑賞教育振興会、2001年、p. 13
- 7 寺田貴雄「日本における音楽鑑賞教育の軌跡二、〈鑑賞〉意識の増大と鑑賞教育論の立場」『おんかん 音楽鑑賞教育』No. 391、音楽鑑賞教育振興会、2001年、pp. 11-12
- 8 明治17（1884）年福島県出身。福島県師範学校簡易科を卒業し、小学校音楽科専科教員の資格を取得した後、東京音楽学校甲種師範科に進学。卒業後は小学校の訓導を経て大正6（1917）年から昭和6（1931）年まで東京高等師範学校附属小学校訓導を務めた。その後、文部事務官等を経て武蔵野音楽大学短期大学部教授となり、昭和32（1957）年73歳で没した。
- 9 小川友吉（青柳善吾）「鑑賞的教授に就て」『音楽』第6巻第2号、東京音楽学校校友会、大正4（1915）年、pp. 2-13
- 10 同上、pp. 2-3
- 11 同上、p. 3
- 12 同上、pp. 4-5
- 13 三村真弓「青柳善吾の音楽鑑賞教育観」『エリザベト音楽大学研究紀要』XXV、2005年、p. 35
- 14 同上
- 15 同上
- 16 山本壽『音楽の鑑賞教育』目黒書店、大正13（1924）年
- 17 津田昌業『音楽鑑賞教育』十字屋書店、大正13（1924）年
- 18 寺田貴雄「日本における音楽鑑賞教育の軌跡五、大正期の鑑賞教育論へのアメリカの影響」『おんかん 音楽鑑賞教育』No. 395、音楽鑑賞教育振興会、2001年、p. 22
- 19 同上、pp. 22-23
- 20 三村真弓「大正期から昭和初期の小学校唱歌科における音楽鑑賞教育の変遷」『音楽文化の創造』62号、2011年、p. 39

- 21 同上
- 22 同上
- 23 同上
- 24 MALCのレコード鑑賞教材は、当然のことながら米ビクター社のレコードが列挙されているが、それらの一覧も全て訳出されている。
- 25 日本教育音楽協会『本邦音楽教育史』音楽教育書出版協会，昭和9（1934）年，（復刻版：第一書房，1982年），pp. 363-364（本書は青柳が著したとされている）
- 26 『標準唱歌学習帖』、『唱歌科教授提要』共に，正榕会が編集・発行している。こういった研究団体は当時の師範学校の附属学校内には一般的に置かれており，例えば内地では東京高等師範学校附属小学校の「初等教育研究会」，東京女子高等師範学校附属小学校の「児童教育研究会」，奈良女子高等師範学校附属小学校の「学習研究会」などが，植民地台湾では台北第一師範学校附属小学校の「正榕会」の他に，台北第二師範学校附属公学校の「麗正会」，台中師範学校附属公学校の「同光会」などがある。教材や教授法について研究を行い，副教材や教授細目，研究成果集，教育雑誌などを編集・発行した。
- 27 歌唱教材の解説や楽典の練習問題などが収められている。
- 28 台北第一師範学校附属小学校内正榕会『唱歌科教授提要』台湾子供世界社，昭和3（1928）年，p. 86
- 29 楽典指導は低学年では行われず，第3学年の2学期からとなっている。
- 30 この2曲は国内レーベルである。
- 31 第1学年用教材の《ツキトガン》がその1曲である。レコード番号は、『学習帖』では日蓄の「48684」であるが、『音楽の鑑賞教育』でも『音楽鑑賞教育』でも「4831」となっている。日蓄の番号はこれらの文献で見るとすべて4桁の番号であることから、『学習帖』の「48684」という5桁の番号は誤っている可能性が高い。因みに『音楽の鑑賞教育（p. 339）』・『音楽鑑賞教育（p. 167）』によると，この曲の詞は，「澄宮殿下」（後の三笠宮崇仁親王）の作である。
- 32 レコード番号が落ちている楽曲が2曲あるが，曲目から，海外レーベルのものと推測はできる。
- 33 詳しくは，拙著『植民地台湾における公学校唱歌教育』明石書店，2007年，pp. 166-169を参照のこと。
- 34 台北第一師範学校附属小学校内正榕会『標準唱歌学習帖』台湾子供世界社，昭和2（1927）年，p. 2
- 35 前掲注28，p. 3
- 36 明治31（1898）年兵庫県出身。私立尋常中学鳳鳴義塾（現在の兵庫県立篠山鳳鳴高等学校）卒業と同時に台湾に渡り，国語学校公学師範部甲科（内地人対象の公学校教員養成課程）に学んだ。詳しくは，拙著『植民地台湾における公学校唱歌教育』明石書店，2007年，pp. 117-123を参照のこと。
- 37 前掲注28，pp. 24-25
- 38 同上，p. 24
- 39 例えば，李金土「文化生活と音楽鑑賞（一）」『台湾教育』297号，昭和2（1927）年3月，pp. 39-42，高梨寛之助「小公学校に課すべき音楽の鑑賞教育」『第一教育』第8巻第8号，昭和4（1929）年8月，pp. 7-15，等がある。
- 40 前掲注28，p. 26
- 41 前掲注28，p. 25
- 42 明治21（1888）年生まれ，昭和20（1945）年没。長野市城山尋常高等小学校，神戸市東須磨尋常小学校で唱歌・音楽の専科訓導として教育実践活動を行うとともに，多くの著書や論文を著した。
- 43 北村久雄『音楽教育の新研究』モナス，大正15（1926）年
- 44 同上，p. 11
- 45 原文の漢字の誤りを正した。
- 46 前掲注42，p. 614
- 47 前掲注28，p. 15
- 48 前掲注26，p. 369